

観音巡礼のフィールドワークからの逆照射 — 四国遍路と比較巡礼研究 —

浅川 泰宏 (埼玉県立大学准教授)

Shikoku Pilgrimage and Comparative Pilgrimage Research seen through fieldwork related to Kannon Pilgrimages **Yasuhiro ASAKAWA** **Associate Professor, Saitama Prefectural University**

This paper attempts to explore the contemporary characteristics of Shikoku and other pilgrimage temples through a comparison based on fieldwork between the Shikoku pilgrimage and Kannon pilgrimages. From the standpoint of a pilgrim, I observed and compared how the pilgrims view pilgrimage related objects such as the statue of the main deity and of Kōbō Daishi; how they use the temple bell and the statue of Binzuru (a Buddhist statue that you can touch); and how they practice the rituals of the pilgrimage such as lighting a lantern, offering incense and an *osamefuda* (name-slip). As a result, I discovered that (1) bells can be rung at many temples in Shikoku, however, there are only a few temples where bells can be rung on Kannon pilgrimages, (2) worship of the principal deity where pilgrims remove their shoes to enter the temple building is a characteristic along the Mogami and Okitama pilgrimages when the statue can be viewed by the public, (3) the custom of attaching *osamefuda*, which was discontinued in Shikoku during the Showa period, continues as a unique culture at Mogami and Okitama pilgrimage temples, and (4) along regional pilgrimages, the pilgrims themselves open and close the temple doors, turn on a light or shine a flashlight to see the statue of the main deity and do not light candles or incense sticks in order to prevent fires. Replaceable pages with the red stamp of each temple are also being used, etc. These are all creative ways to maintain pilgrimage culture despite depopulation. The results (1) reaffirm that the *junrei no oto* (sounds of pilgrimage), such as the temple bell and bells carried by the pilgrims, are a part of the local culture that represents Shikoku. For this study, I also focused on *tsue tate* as a characteristic of the Shikoku pilgrimage that has not been studied in previous research. The *tsue tate* is a stand in which pilgrims leave the walking staffs they carry when they visit each temple and in Shikoku, *tsue tate* can be found at all the temples. Various types have been given to the temple and are in use near the purification basin, the main hall, the Daishi hall, or the *nōkyō-sho* (temple office). While the landscape in which *tsue tate* blends in has been established at Shikoku's *fudasho* (sacred places), it is difficult to say that it has taken root as part of the culture of the Kannon pilgrimages. Such a landscape with *tsue tate* cannot be found in old photo albums from Shikoku, Saigoku, and other pilgrimage temples. From this observation, I conclude that although further study is needed regarding the historical background of *tsue tate* it may be a new pilgrimage culture that emerged in Shikoku, where the staff is regarded as an incarnation of Kōbō Daishi and as people's perception of the staff has changed in recent years modern respect for Kōbō Daishi has materialized.

1 四国遍路と観音巡礼の比較研究

1) 比較巡礼の先行研究：全体像把握と類型化

本稿は四国遍路と観音巡礼のフィールドワークに基づく比較から、それぞれの現代の特徴を探索する試みである。四国遍路は弘法大師信仰に基づく聖跡巡礼、観音巡礼は観音信仰に基づく本尊巡礼で、共に日本の複数聖地型巡礼の代表例である。議論に先立って本稿に関わる主な先行研究を概観しておきたい。

日本宗教学会における巡礼研究の嚆矢が小池長之の学会発表である。小池は四国遍路と観音巡礼の比較から、巡礼は民間信仰の一形態であり、その宗教体験の中核は旅による修行性にあると理解した [小池 1950]。

つまり日本宗教学会での巡礼研究は比較研究から出発したといえる。小池の問いが「巡礼とは何か」であるとするならば、「巡礼にはどのようなものがあるのか」という問いに答えるのが中尾堯の巡礼辞典である〔中尾編 1999 (1973)〕。日本全国に展開する100余の複数聖地型巡礼を網羅する同書は、小池が「巡礼の生命ともいうべき修行性がない」〔小池 1950 : 84〕と軽視した写し霊場を丹念に掬い上げることで、巡礼が多様で身近なものでもあることを示した。歴史研究から巡礼の多様性を拡張・深化させたのが新城常三である。新城は複数聖地型の巡礼と単一聖地型の参詣を包括し、西国、四国、六十六部や熊野、伊勢、高野山など日本の主要な社寺参詣の中近世の具体像を描き出した〔新城 1982〕。これらは多様な巡礼の全体像の把握を目指すものと言えるだろう。

他方、巡礼の多様性を整理し、巡礼の共通性や個性の抽出を試みたのが類型化である。星野英紀は海外の巡礼も視野に入れ、集団型／個人型、開放型／閉鎖型、複数聖地型／単一聖地型、激憤型／静寂型などの様々な比較軸での類型化を検討した〔星野 2001〕。近年では宗教研究とツーリズム研究の接合から、信仰・慰霊・顕彰／ツーリズム・文化財と宗教的聖地／非宗教的聖地を軸とした現代聖地の動態的類型も提示されている〔星野・山中・岡本編 2012〕。民俗学でも真野俊和や小嶋博巳らによって、広義の巡礼／狭義の巡礼、本尊巡礼／聖跡巡礼（祖師巡礼）、オリジナルな巡礼／うつしの巡礼（地方巡礼）、定型的な巡礼／非定型的な巡礼などの概念整理がなされた〔小嶋 1987〕〔真野編 2006〕。冒頭で用いた聖跡巡礼、本尊巡礼、複数聖地型などの表現はこうした先行研究の恩恵によって可能になっている。

2) 四国遍路と観音巡礼

四国遍路と観音巡礼を比較する主要な先行研究に、前田卓の社会学的研究〔前田 1971〕や新城常三の歴史学的研究〔新城 1982〕がある。ここでは両者に共通する四国遍路特殊論ともいうべき視座を確認しておきたい。端的にまとめると、それは西国に代表される巡礼・参詣が総じて時代とともに遊楽・観光に傾斜していくのに対し、四国では弘法大師への厚い信仰が根付いており、それゆえ巡礼者への接待や巡礼の苦行性が継続したという解釈である。西聡子は、新城が示す四国遍路の特徴を、①苦行性が高い点、②遍路を行う者の信仰心の篤さ、③遍路を行う者の階層や境遇、④「四国民衆」の弘法大師信仰を背景とした遍路に対する援助・接待の4点にまとめ、こうした四国遍路像が後の研究に大きな影響を与えたと指摘している〔西 2022 : 3〕

前田は新城に刺激を受けつつ⁽¹⁾、近世の納札・過去帳調査や現代のアンケート調査から、上記のような四国遍路像を数的なデータを用いる角度から補強した。さらに前田の研究の継承者といえる佐藤久光は、遍路と巡礼の共通習俗を検討し、多くの巡礼習俗が西国から四国を含む他の巡礼に伝わったという西国中心の「周圏論」的な視点を示した〔佐藤 2006〕。

筆者も2012年度に四国遍路と坂東巡礼のフィールドワークを踏まえた比較研究を行った。星野英紀がA. ヴァン＝ジュネップの通過儀礼論をモデルに提示したという巡礼の基本構造〔星野 2001 : 21〕をもとに、聖地における神聖性への近接を巡礼者はどのように実感するのかという観点から、本尊や弘法大師像といった巡礼対象の拝観、梵鐘、賓頭盧尊者像（なで仏）などを調査項目とした比較研究を行った〔浅川 2013〕。

本稿は、その後の筆者の調査を踏まえた再検討である。四国遍路と多様な観音巡礼を比較しつつ、それぞれの巡礼の共通性や「個性」を照らし出すことが本稿の目的である。

2 方法

1) 調査対象と調査時期

本稿で扱う調査対象と調査年度は次の通りである。四国八十八カ所(2012)、坂東三十三観音(2012, 2021)、北海道三十三観音(2016)、西国三十三所(2018)、置賜三十三観音(2019)、秩父三十四観音(2022)、最上三十三観音(2022)。なお本稿では霊場を個別の札所ではなく巡礼全体を示す用語として用いる。以下、原則として霊場名は、議論に差し支えない範囲において地域名で略称する。調査年度を区別する必要がある際には霊場名の後ろに付記する。

西国2018は西国三十三所草創1300年、坂東2021は丑歳疫病退散祈願巡礼、置賜2019と最上2022はやまがた出羽百観音の連合御開帳に相当する「聖年」〔浅川 2015〕である。一方、坂東2012、北海道2016、秩父2022

は平年である。四国2012は逆打ち信仰のある閏年に相当するが、霊場全体として特別な記念印や御開帳などの聖年行事が組まれたわけではないため、本稿では平年とみなす。なお四国、西国、坂東、秩父については、上記の年度以外にも別に調査した経験がある。必要に応じて、これらも説明に用いる。

2) 調査項目

前稿 [浅川 2013] を継承し、①巡礼の対象である本尊等が拝観可能か。②梵鐘を撞くことができるか、③賓頭盧尊者像が撫でられるかの3項目を巡礼者の立場で調査した。さらに各霊場の公式サイト等にある巡礼方法の検討から、献灯、献香、納札、納経・朱印等がどのように実践できるかについても参与観察した。比較には札所数を分母とする割合を用いる。四国は88、西国、坂東、北海道、置賜は33、秩父は34である。最上については、番外札所の世照が別当会による公式サイトに記載されているため、これを含めて分母を34とした。なお四国と坂東2012、北海道の数値は既刊の拙論 [浅川 2013, 2019] からの再掲である。

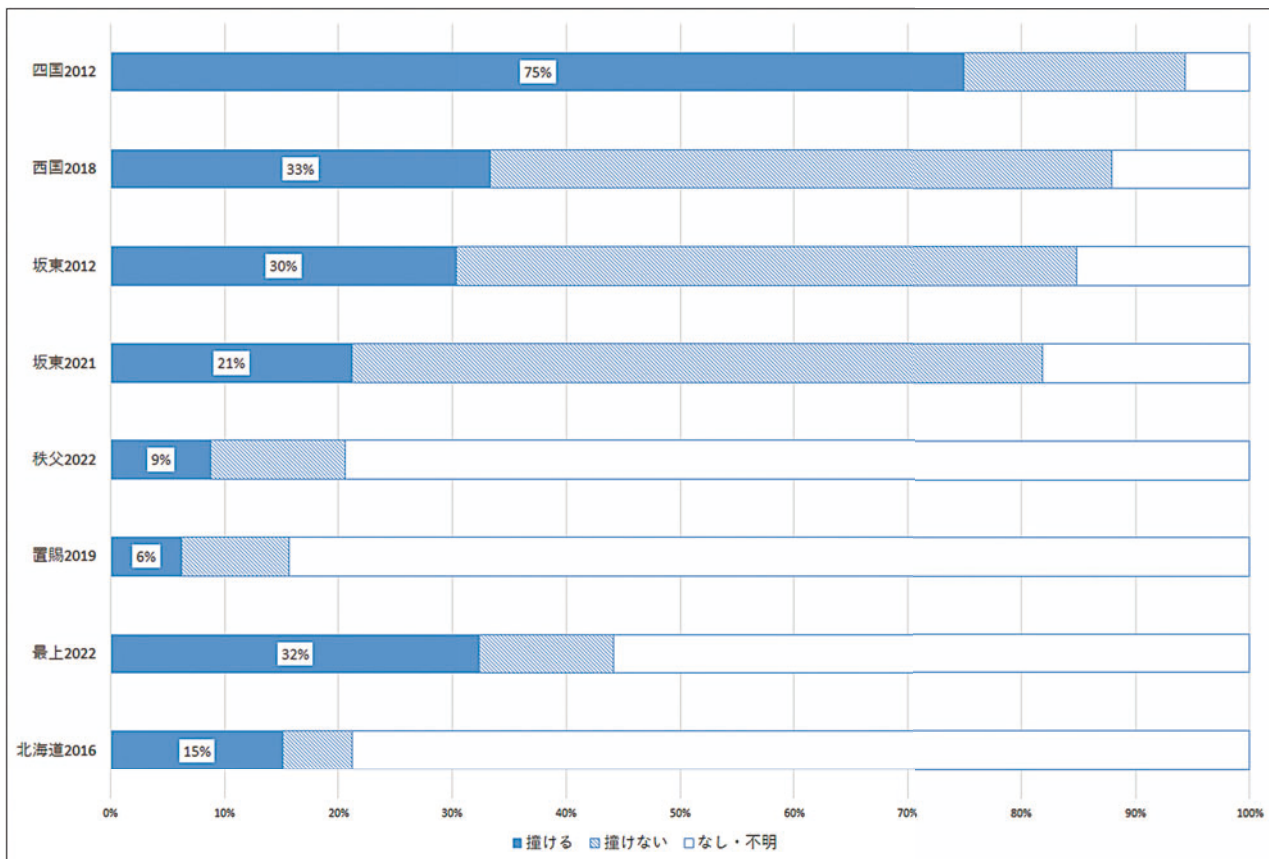
3 結果

1) 梵鐘

梵鐘は①撞ける、②撞けない、③なしの3つに分類できる (図1)。巡礼の作法に梵鐘を撞くことが記されているのは四国、坂東、最上で、自由に撞けるところのみ、下山時は撞かないことが付記されている。なお巡礼者が自由に撞けない状況とは、鐘楼が閉鎖されている、撞木が固定されているなどが該当する。

梵鐘がある札所の割合が高いのは、四国 (83カ寺, 94%)、西国 (29カ寺, 88%)、坂東2012 (28カ寺, 85%)、そして最上 (15カ寺, 44%) である。秩父、置賜、北海道は梵鐘がある寺院は1~2割にとどまる。梵鐘が撞ける寺院の割合は、四国 (66カ寺, 75%) が圧倒的に高い。以下、西国、坂東2012、最上が3割程度である。西国や坂東は、梵鐘があっても巡礼者に開放していない札所が多い。前稿で「四国では巡礼者が撞く鐘の音を地域の文化を表象するものと積極的にとらえる土壌がある」 [浅川 2013: 136] と指摘したが、改めてそのような四国の個性を確認したといえる。

図1 梵鐘の比較



なお梵鐘を撞く際に撞木の紐を触る必要があるため、コロナ禍の影響で利用中止になることがありうる。坂東2021では2012年度から梵鐘が撞ける札所が3カ寺減少した。ただし2カ寺は2014年度の段階で撞けなくなっていたので、コロナ禍の感染対策とは言い難い。また秩父の②に該当する4カ寺のうち、感染対策のためと明記されていたのは1カ寺のみであった。

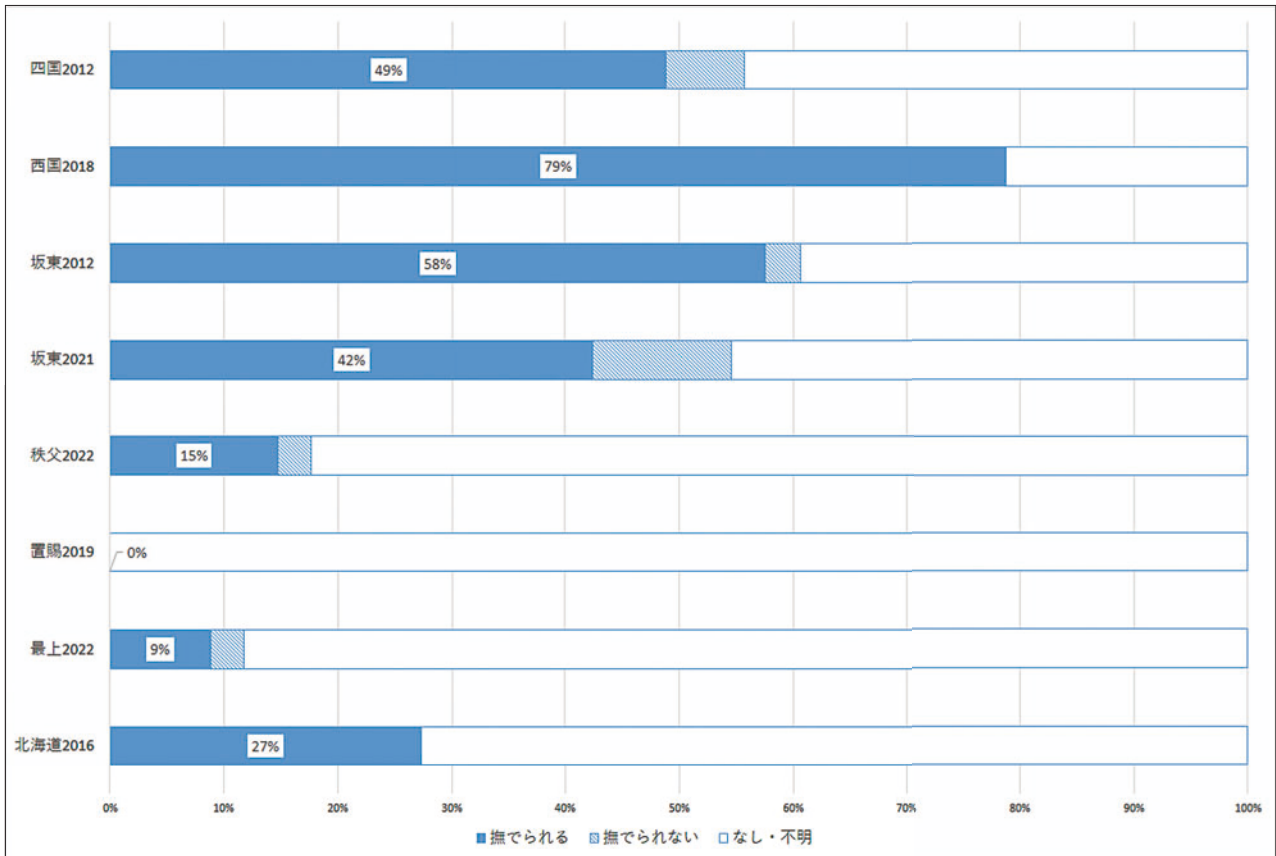
2) 賓頭盧尊者像

賓頭盧尊者像も、①撫でられる、②撫でられない、③なしの3つに分類できる(図2)。賓頭盧像が撫でられる札所の割合が高いのは、西国(26カ寺, 79%)、坂東2012(19カ寺, 58%)、四国(43カ寺, 49%)である。賓頭盧尊者像がある札所の割合と実際に撫でられる割合が高いことから、撫で仏としての賓頭盧尊者像が最もポピュラーなのは西国と言える。また西国で注目したいのは、2番紀三井寺、3番粉河寺、27番圓教寺など直接手で撫でるのではなく、「はたき」や「打ち払い」などを用いて間接的に撫でる札所が複数あったことである。とりわけ圓教寺では「昨今では衛生面のこともあって打ち払いを用いて手で撫でるようになってきました」との説明書きがある。コロナ禍を見通したような事例で興味深い。

前稿では、賓頭盧尊者像は大師信仰と観音信仰の垣根を超えた超域性を持つと指摘した。一方で、置賜、最上、秩父など、札所規模の小さい霊場では賓頭盧尊者像がないケースが多いことも見えてきた。賓頭盧尊者像は撫で仏としての役割から堂外や縁側などに設置される例が多い。だが、北海道や最上では室内に設置されている例が目立つ。北海道は冷涼な気候に対応した室内参拝型の巡礼文化を構築してきた証左とした[浅川 2019]が、後述するように最上も靴を脱いで堂内に上がる巡礼文化があることにも留意したい。

賓頭盧尊者像は梵鐘以上にコロナ禍における感染対策の対象となりうる。坂東2021では2012年に比べて撫でられる札所が5カ寺減となった。4番長谷寺では感染対策から賓頭盧尊者像がビニールシートで覆われた。1番杉本寺など堂内への立ち入りが制限されたことによって触れなくなった例もある。最上16番長岡観音でも感染対策のため「撫でたという気持ちでお祈りしてください。」との但し書きがあった。

図2 賓頭盧尊者像の比較



3) 本尊拝観

本尊は「なし」という場合が想定しにくいので、拝観できるかできないかの2分類になる。本稿では本尊の「顔」が見えることを拝観可能の基準とした。本尊はそもそも秘仏や非公開であることが多く、かわりに前立本尊を公開するという場合も少なくない。本尊と前立本尊との区別は解説や寺院関係者への確認で判断しているが、聖年と平年の違いが大きく、札所ごとの歴史的経緯などもあって調査も比較も難しい。本調査全体にいえることだが、特に本項目に関しては、数値は厳密な違いを明らかにすることを目指すものではなく、大掴みの傾向を示すものと理解されたい。

前稿では四国は本尊が拝観できる札所は10カ寺（10%）と少ないが、納経者は御影を通して全ての本尊の姿を知ることができる「秘せる本尊」であること。坂東は本尊が拝観できる札所は24%と四国の約2.5倍であるが、美的・文化財的な価値を有する本尊を拝観料や入山料を納めて拝観するというスタイルが特徴的な「魅せる本尊」であると指摘した〔浅川 2013：136-138〕。

その後の調査で平年に該当するのが北海道2016と秩父2022である。北海道では31カ寺（94%）の札所で本尊が拝観できたのに対し、秩父では全ての札所で本尊は拝観不可だった。秩父は午歳に総開帳を行う霊場である。筆者も2014年の午年総開帳時に全ての札所で本尊拝観が可能であったことを確認している。また御開帳時には巡礼者が激増することも指摘されている〔佐藤 2009：106-119, 162-163〕。以上から、秩父は平時と聖年の差が著しい、オン／オフのはっきりした霊場であるといえる。

聖年に該当するのが、西国2018、置賜2019、坂東2021、最上2022である。西国で本尊が拝観できたのは11カ寺（33%）である。坂東2021では14カ寺（42%）で本尊拝観が可能であった。平年の坂東2012に比べると2倍近く増加したことになる。首都圏に緊急事態宣言が発出されていた時期も含むコロナ禍での聖年であったが、随所にアルコール消毒を併置するなど、札所側が工夫を凝らして御開帳を実施したことがわかる⁽²⁾。置賜では本尊や前立本尊が拝観可能だったのは28カ寺（85%）である。うち本尊と考えられるものは15カ寺（45%）であった。最上では本尊が拝観可能だったのは30カ寺（88%）で、前立を含めると全ての札所で巡礼対象が拝観可能であった。

巡礼者にとって本尊は聖地札所の神聖性の中核である。その聖なる中心にどのように近接できるのかという点について、普段から拝観可能である霊場、平年は拝観できないが聖年には多くが開帳される霊場、また聖年であっても秘仏・非公開が護持される札所も多い霊場など、それぞれの個性が表れる結果と言えよう。ところで、北海道の巡礼方法はやや特殊である。北海道の札所は本堂と庫裏そして祭礼会館が室内通路で連結された構造が多い。冷涼な気候や葬儀や年忌法要を寺院内で行ってきた歴史的経緯に由来する建築構造と事前連絡が求められる交流のかたちから、玄関で靴を脱いで建物に入り、室内廊下を歩いて本堂に赴き、観音像を間近で参拝するという室内参拝型の本尊拝観を特徴とする〔浅川 2019〕。

最上の御開帳も観音堂が開放され、靴を脱いで堂内に上がり込んで参拝するスタイルをとる。北海道に類似するが、最上は独立した観音堂に直接入る点が異なる。今回の調査では全札所で靴を脱いで堂内に上がるのが可能であった⁽³⁾。四国の「秘せる本尊」、坂東の「魅せる本尊」に倣うならば、北海道や最上は「上される本尊」ともいべき特徴が指摘できる。

4) 納札

巡礼対象の寺社を「札所」と呼ぶように、納札は四国遍路や観音巡礼などの複数聖地型巡礼の共通要素である。今日では紙製の納札を納札箱に奉納するのが一般的である。一方、最上と置賜の納め方は独特である。ここでは納札を御堂の壁や扉に糊貼りする。堂外に貼付板が用意されているところもある。基本的には巡礼者は糊を持参し、納札の上部を糊付けしていく。貼り付けスペースに対して札が多い時は、既存の納札に重ね貼りしたり、繋げ貼りしたりもする。置賜では23カ寺（85%）、最上では全札所で貼付式であった。このような札の納め方を最上では「おふだぶち」と称する。「お札打ち」の方言であり、最上の特徴というよりは、(かつてはどこでも木札を打ち付けたように)むしろ巡礼の本来のあり方であるという説明があった⁽⁴⁾。とりわけ御堂の壁一面に貼り付けられた、また時には梁からのれんのように連なった数多くの納札は、それだけ巡礼者が訪れた証であり、巡礼の共同性を可視化する凄みを魅せる景観である（図3）。

現在の四国や西国、坂東、秩父等では、札は納札箱に入れる。四国の場合、この納札箱は戦後昭和に一般

化したようだ。民俗学者の調査によると、1960年代は「納め札はたいいていの場合、大師堂の拝所の横の柱や壁にはりつけてある」[武田1969:7]という状況であった。その後、「ほとんどは紙札を糊で柱に貼っていく程度である…最近の札所はこれをきらう。今ではほとんど仏前に箱を置いてこれを入れさせるようにしている」となったが、「ゴミ箱」といって評判が悪かったという[真野1980:52]。同時期の遍路記等にも、「納め札は各霊場の本堂や大師堂、その他おまいりしたところに納める。各お堂には納め札受の籠や、曲げた針金（さしこむように）を下げている。」[西端 1964 (1972):47]、「参拝したところにはりつける」[平幡 1969:26]、「納経札は住所氏名を書いて本堂、大師堂前の納経札入れに納める。」[瀬戸内放送編 1972:269]など、さまざまな納め方が混在していたようだ。現在ではどの札所でも納札箱がアタリマエになっているが、このような文化が定着したのは概ね1980年代以降と考えられる。

最上や置賜では、他所で廃れた貼付式納札が継続しているが、さまざまな葛藤もある。貼られた納札は定期的に剥がす作業が必要になる。札を貼る・剥がすという行為が建物を傷める心配があるという文化財保護の観点がまず想起されるが、より深刻なのは火事の心配であるという。なるほど上部のみが固定された薄い紙の納札は、文字どおり火災を呼ぶ火種になりかねない。他にも、貼る場所によっては、扉や引き戸の開閉に支障をきたしたり、剥がれた納札（あるいは糊がなかったせいか、石で札を抑えただけの札もたびたび見た）がゴミになったりという問題もある。堂内に納札箱を設置した札所もあるが、かつての四国同様「人気がなく」「あまり入れてくれない」という⁽⁵⁾さまざまな問題を抱えながらも、糊を持参し定められた場所に貼るというルールを札所と巡礼者が共有することで今のところ継続されている「伝統」といえよう。

四国遍路では多度巡礼者が用いる金札や錦札が御利益あるものとされ、これを納札箱から持ち帰るといふ民俗があった⁽⁶⁾[松山市教育委員会編 1981:97-98]。最上にも巡礼回数に応じて、納札の色がランクアップする制度がある。銀札（8~9回目）や金札（10回目以上）は御利益があり⁽⁷⁾持ち帰って良いと説明された。そして、そのような札は貼らずに堂内に置いてあるのだという。筆者もある札所で「さっき銀札を置いてきたのでよかったですら持ち帰ってください」と声をかけられた。観音堂内を確認すると、なるほど経机の上に真新しい銀札が確かに置いてあった。その巡礼者はこのように札を置く理由を、「まだ巡拝回数が少ない時に自分たちもお世話になったので、その縁を次に渡したい」と語った。堂内に翻るおびたしい納札の背後で、このような「縁のリレー」が密かに行われていることも最上の特徴である。

5) 地方霊場における巡礼文化の伝承と創造性

置賜では謎かけのような光景に出会った。ひとつは未使用のまま奉納されたろうそくと線香である(図4)。置賜の公式サイトには「線香台や灯明台のない観音堂では火をつけずにお供えください」という但し書きがある⁽⁸⁾。献灯と献香は文字通り「灯」と「香」を献ずる行為であり、その手段として一般的なのがろうそくと線香である。ろうそくと線香は着火することで、献ずべき光と香を発するが、ここでは点火せずに「見立て」によって光と香を献ずるかたちになっている。無人の札所や有人であっても観音堂と朱印所等が離れているため管理が難しい場合に火災防止の観点からこのような措置がとられて



図3 最上の「おふだぶち」
(最上30番丹生観音にて2022/10筆者撮影)



図4 置賜の火をつけない献灯・献香
(置賜31番五十川観音にて2019/10筆者撮影)



図5 置賜の懐中電灯 格子の左右2基の
懐中電灯が紐で結ばれている
(置賜17番芹沢観音にて2019/10筆者撮影)

御開帳中の本尊が良く見えるようにという札所側のホスピタリティの表れであるが、それを巡礼者自身が操作するというのが面白い。

このような巡礼者の「セルフ・サービス」は最上でも別の形である。最上では観音堂内に上がり込む室内参拝が特徴としたが、その際、観音堂の堂扉の開閉が巡礼者自身に委ねられていることも少なくない。重く、納札がびっしり貼られた観音堂の扉を自分で開けるという行為は他ではできない経験である。

置賜や最上のこのような光景の背後には、札所を支える人材の不足という問題が透けて見える。より深刻なのは納経・朱印であろう。置賜では1つの朱印所が複数の札所の朱印をまとめて担当する場合がある。最上でも墨書の書き手がいない札所があった。そこでは朱印だけを押してもらい、別の札所で墨書を依頼するように案内された。最上三十三観音別当会が定める志納金にも「代筆」の項目が設定されている。

こうした問題への対応策が「差替式」朱印帳の導入である。置賜や最上の公式朱印帳として採用されているもので、二つ穴の閉じ紐式になっている。巡礼者は札所で該当の白紙ページを差し出し、予め朱印と墨書がなされたページと「交換」してもらおう。一般的な書置き朱印は、紙の大きさや色や質感がまちまちになるし、手持ちの朱印帳に糊貼りする必要があるなどの点でも、見た目の統一感が損なわれる場合がある。しかし、この差替式朱印帳は同一規格のページを交換して紐綴じするため、できあがった朱印帳の見た目は直書きされたものとほとんど変わらない。

差替式は団体や混雑への対応という側面もある。地方霊場では朱印所の窓口はひとつしかない場合が多く、タイミングによっては朱印待ちの列ができるが、差替式ならば短時間で済むことが期待される。最上では朱印所が混雑した際、すぐに差し替えができるよう該当のページを外して待つように案内された。だが巡礼者側には戸惑いもあり、差し出すべきページがわからず、朱印所と観音堂を右往左往する様子もみられた。

朱印が巡礼者自身の手に委ねられる場合もある。置賜では、朱印所が無人であったり、留守であったりする場合、巡礼者自身が差し替えをするように案内された札所も複数あった。北海道の公式朱印帳は墨書が印刷されており、巡礼者自身が朱印を押すかたちをとる。もちろん置賜や最上でも墨書の書き手がいる場合は直書きしてもらえ、北海道でも寺院側が朱印を押してくれる場合もある。だが、四国や西国のような納経のとり方は地方霊場ではかならずしもアタリマエではなく、あらためて札所や納経所・朱印所を維持する労力について考えさせられる。

これらの事例からは、過疎化や高齢化に直面する地方霊場で、御開帳や巡礼文化を存続させるためにさまざまな創意工夫を行っていることが理解できよう。そこでは、扉の開閉や本尊のライトアップ、時には納経・朱印など札所が担ってきた労力の一部を巡礼者のセルフ・サービスに委ねる方向に活路が見いだされている。それでも「次の御開帳はできないかも」(置賜)というような心配の声もある。他方、最上の番外世尊院では、墨書の色や装飾など数種類のデザインを用意し、巡礼者の好みによって選べる朱印を実施している。これは差替式であることを逆手にとった新たな巡礼の「楽しみ」の創造といえるだろう。

4 観音巡礼からの気づき：杖立が溶け込む四国の風景について

1) 巡礼の共通性と杖立の「発見」

四国遍路と観音巡礼にはもちろん共通する点も多い。例えば、佐藤は両者に共通する要素として、御詠歌や菅笠と金剛杖など10項目をあげ、これらについては西国巡礼の習俗が四国遍路に与えた影響が少なくないと述べる〔佐藤 2006：43〕。佐藤があげる10項目については、いくつか再検討の余地もあると筆者は考えるが、巡礼者が札所で何をすべきなのかという点は、四国遍路も観音巡礼もかなり似通っている。どちらかの経験があれば、巡礼対象を参拝し、札を納め、朱印をとるという流れは改めて説明を受けなくても実践できる。そのようなことが可能なのは、札所がそのような環境を提供しているからである。本堂や大師堂、観音堂の周囲には、燭台や香炉があることで献灯・献香が促されるし、納札箱（最上や置賜では貼付場所）や写経入れが用意されていることで、札や写経を納めることができる。心理学のアフォードンスの概念〔ギブソン, J. J. 1985 (1979)〕を借用すると、札所は巡礼者に巡礼行為をアフォードする環境を提供しているのである。

筆者もそのようにして四国遍路と観音巡礼を行き来していたが、2021年の坂東巡礼を調査中にふとした違和感を覚えた。それは、四国ではアタリマエのように札所にあると思っていた「杖立」が、坂東では見あたらないことに気づいたからである。例えば、四国49番浄土寺では、2022年10月の時点で手水に1基、本堂に2基、大師堂に1基の杖立が設置されている。一方、坂東では杖立はほとんど確認できない。両者の公式サイトには、共に金剛杖が巡礼用品として紹介されている。だが杖立については、両者は異なる様相を示すようだ。この点に関心を持った筆者は、各霊場の杖立の設置状況を改めて確認する作業を行った。ただしコロナ禍の制約もあり、ひとまずこれまでの調査で撮影した札所の風景写真を利用し、いわばアーカイブワークを通して、各霊場の杖立の設置状況を検証することにした。

2) 杖と杖立

検証に先立って「杖立」とは何かという点を確認しておきたい。『日本民俗大辞典』によると、巡礼の杖は歩行の補助具という実用性と呪具としての象徴性を併せ持つ。僧侶や修験者は錫杖を、在俗の巡礼者は金剛杖を持つ。とりわけ四国遍路では、金剛杖は五輪塔すなわち死の象徴であり、弘法大師そのものと理解される。これを携行することで同行二人の観念を具体的に表象し、俗人の巡礼者に呪力を付与する呪具であると説明される〔真野 2000：121〕。岡正雄は「異人はその異人たることを象徴する杖及び音を有せしこと」〔岡 1994：119〕と述べる。つまり巡礼の杖は巡礼者が巡礼たることを象徴する重要性を担うものである。

一方、杖立は『日本民俗大辞典』に項目立てされていない。文字通り杖を立ておくものと考え、札所に設置される杖立には主に3つの役割が考えられる。①巡礼者が携行する杖を参拝中一時的に預かるもの、②杖を持たない巡礼者に杖を貸し出すもの、③結願後に巡礼者が納める杖を保管するものである。それぞれ、①預杖型、②貸杖型、③納杖型とする。本稿で注目するのは①預杖型である。以下、四国、西国、坂東、北海道、置賜についてはアーカイブワークで、2022年に調査する機会が得られた秩父と最上についてはフィールドワークで確認した杖立の設置状況を述べる⁽⁹⁾。

3) 各霊場の杖立

四国では全札所に杖立を確認した。石製、金属製、木製など複数のタイプが併存し、本堂、大師堂、納経所、手水など、参拝行為のなかで巡礼者が杖を預けたいような場所に設置されている。四国については、2022年10月に愛媛県の一部の札所でフィールドワークも実施した。その結果、(a)大阪霊場巡拝講奉納の金属製、(b)札所名入りの庵治石製、(c)国際ロータリー奉納の金属製、(d)奉納者不明の木製、(e)石製・金属製のハイブリッド型の5つのタイプを確認した。実際に巡礼者が杖立を活用している状況も複数の札所で確認できた（図6）。

西国では24カ寺（73%）に杖立を確認した。いずれも石製の杖立で、四国のように複数のタイプが各所に設置されているといえるかどうかは不明である。

秩父では30カ寺に杖立を確認した（図7）。ほとんどが金属製の円筒形で、2002年の午年総開帳時に一般社団法人「秩父法人会」が各札所に一基ずつ奉納したものである〔秩父法人会 2002：2〕。ただし、24番法



図7 秩父の杖立
(秩父1番四萬部寺にて2022/08筆者撮影)



図6 四国の杖立 (a)石手寺本堂前、(b)浄土寺本堂前、(c)浄土寺手水前 (2022/10筆者撮影)

図8 最上長谷堂の杖。観音堂前に杖立がないため、入口から持ち込んだ杖はこのように置かれることになる
(最上12番長谷堂観音にて2022/10筆者撮影)

泉寺、31番観音院、32番法性寺では山門や階段下に設置され、貸杖型で運用されている。したがって預杖型の杖立は27カ寺(79%)で確認できた。だが、現在ではあまり利用されているとは言い難い側面もある。錆びや蜘蛛の巣が目立つなど、杖を入れることをためらうような老朽化や他の用途への転用も見られた。

最上では預杖型の杖立は確認できなかった。一方で杖は必需品であるという。12番長谷堂のように小高い山の上にある札所もあるからである。長谷堂への参道入口には貸杖が設置されているが、そこに用意されているのは、金剛杖ではなくほとんどが登山用のスティックであった。観音堂前に杖立はなく、下から持ち込んだ杖は散開することになる(図8)。

北海道では14番丸山寺に石製の杖立が確認できた。ただし先述したように北海道の札所寺院は特殊な構造のため、アーカイブワークでは十分な検証ができない。もし杖立があるならば玄関に設置されるのが合理的だが、北海道の玄関は二重構造になっていることが多く、外からの写真では判別できないからである。

坂東と置賜ではほとんどの札所で杖立と明確にわかるものを確認することはできなかった。

以上のことから、杖立の設置状況や活用状況は各霊場でかなり差があることがわかった。杖立が最も定着しているのは四国である。複数のタイプが存在し、境内のさまざまな場所で活用されている。この複数のタイプが存在していることは重要である。おそらく杖立のタイプには新旧があり、新しいタイプは古いタイプの使用感を踏まえて改良や工夫がなされていると思われる⁽¹⁰⁾。このような改良や工夫はそれだけ杖立なるものがその霊場に「文化」として定着していることを示す。またそれゆえに杖立は燭台や香炉、納札箱などと同様に、そこにあるのがアタリマエとなっていたのではないか。このような様相を本稿では「杖立が溶け込む風景」と表現する。すなわち本稿で確認したことは、現代の四国霊場ではどの札所においても杖立がアタリマエであり、霊場全体として杖立が溶け込む風景が成立しているということである。

5 展望：杖立の登場が意味するもの

最後に今後の展望として、では四国霊場の杖立が溶け込む風景はいつ頃からあったのか、という点について触れておきたい。現在確認できる杖立を眺めると、その成立は意外と新しいと思われる。最も古いであろう(a)には奉納年代の記載がない。しかし(b)は概ね平成期の奉納で、(c)は2004・2005年度事業による奉納と記されている。では、それ以前に四国霊場の杖立はなかったのでしょうか。そこで札所境内を撮影した古写真集を確認してみたい。

四国霊場の古写真としては、『四国霊跡写真大観』(1934)がまず挙げられる。本堂や大師堂の周囲、現在であれば、杖立がありそうな場所に杖立はほとんど見られない。むしろ参拝中の巡礼者を写した写真では、杖は長椅子等に立てかけられている。これは当時、杖立がなかったためではないだろうか。この写真集で唯一、杖立らしきものが写っているのが35番清滝寺である。2名の巡礼者が写っているが、本堂向かって右側にある杖立にはそれ以上の数の杖が挿さっている。これは預杖型の杖立ではなく納杖型の杖立と考えられる。その他の札所では杖立は確認できず、したがって昭和初期の四国霊場では杖立が溶け込む風景は成立していなかったと言えるだろう。

本堂・大師堂周辺に杖立が見当たらず、参拝中の巡礼者は近くに杖を立てかけているという状況は、戦後昭和の岩波写真文庫『四国遍路』(1956)でも同様である。昭和59年は弘法大師の御遠忌1150年であり、四国遍路のひとつの節目であるが、総じてそれ以前の四国霊場の写真には、杖立が溶け込む風景は確認できない。同時期の西国、坂東、秩父の写真集もほぼ同様である。むしろ「近頃、気になることがある。金剛杖を持たないお遍路さんの姿が目立つのである」[朝日新聞 高松、松山、徳島、高知各支局編 1980:189]と四国遍路の杖離れが指摘されている。1990年代に入ると(a)の大阪霊場奉納品らしき預杖型の杖立が認められる[宮崎建樹監修・岡崎禎広写真 1995:59][藤田庄市 1996:86]。

四国遍路は杖への信仰が顕著である。杖は弘法大師の化身とされ、同行二人の思想を具現化する重要性を持つ。それゆえ、宿に着くとまず杖の足を洗う。床の間等に立てかける、刃物で杖を削らないなどの民俗が形成された。その杖を受ける杖立がこれまでなかったとするならば、杖立は杖=弘法大師への信仰や敬意の現代的な変化が生み出したものと考えられる。もちろん、杖自体に象徴性と実用性の二面性があるように、杖立にも杖を忘れないようするという実用的な必要が生み出したという側面も考えられる。

いずれにせよ、杖立の登場は巡礼に関わるさまざまな文化がふとしたとこで変わりうるものであることを再認識させる。それは、ちょうど納札箱の登場によって、納札の納め方が変化したのと同様である。杖立や納札箱というモノがわれわれの巡礼文化を形作る重要な構成要素になっているのだ。

また更なる検討が必要であるものの、現時点では杖立は四国で創造された可能性が高いと考えられる。①四国に数や種類の点で杖立が最も普及しているといえる現状と、②杖を特別視する文化が存在することが理由である。もしこの仮説が正しいのであれば、佐藤が指摘したような西国中心の巡礼文化論に対する、ひとつの反例となる可能性があることを指摘してひとまずの筆をおきたい。

【註】

- (1) 前田は新城の『社寺参詣研究の社会経済史的研究』（塙書房，1964）を随所で参照している。
- (2) 坂東2021については、拙稿「四国遍路と世界の巡礼～愛大研究センター通信～68：令和三年坂東丑歳疫病退散祈願巡礼」『月刊へんろ』第467号（伊予鉄，2023年2月）も併せて参照されたい。
- (3) ただし5番唐松観音はやや特殊な構造である。懸け造りの観音堂の大部分は土足のまま移動するが、観音像前に畳敷きの一段高いスペースがあり、そこに靴を脱いであがって参拝できる。
- (4) 最上33番庭月観音で伺った。
- (5) 最上30番丹生観音で伺った。
- (6) ただし現在の四国の公式サイトでは、納められた札を手取る行為はマナー上良くないものと注意されている（<https://88shikokuhenro.jp/basic/supplies/>）
- (7) 最上の公式サイトには「安産守札」とある（<https://www.mogami33.com/about/necessity.html>）
- (8) <https://okitama33.net/about/>
- (9) アーカイブワークに用いた資料は、本稿で比較に用いた調査年度以外に、四国と秩父は2008年度以降、坂東は2009年度と2014年度、西国は2019年度の写真も含む。
- (10) 最も古いのは(a)の大坂巡拝講奉納品であり、(b)(c)は(a)の使用経験を踏まえた改良品と考えられる。例えば(a)は内部に金具が露出していて杖の出し入れの際に気になること、開口部が広く杖が散らばりやすいこと、側面から杖がはみ出る可能性があること等の課題があるように思われるが、同じ金属製の(c)ではその点が解消されている。また筆者も試してみたが、杖立の高さも重要で、低すぎると杖が乱雑になり、高すぎると出し入れがしにくい。(b)が低めに作られているのは、杖の出し入れに配慮したためと思われる。

【付記】

本稿は愛媛大学附属四国遍路・世界の巡礼研究センター2022年度公開講演会・シンポジウムでの講演「観音巡礼からの逆照射—比較巡礼と四国遍路」（2022/10/29, 愛媛大学）を元にしたものである。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費 JP21K01060, JP20H01309, JP25870588、埼玉県立大学奨励研究費 2021年度A21003, 2019年度A19003, 2018年度A18003, 2016年度C-2の助成を受けたものです。また調査に際してお世話になった関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 浅川泰宏 2013「聖なるものを見る、聴く、撫でる—四国遍路と坂東巡礼—」愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会『巡礼の歴史と現在 四国遍路と世界の巡礼』岩田書院, pp.127-144
- 浅川泰宏 2015「巡礼が刻む道と時」『歴史地理学』57(1), pp.4-13
- 浅川泰宏 2019「北の大地のハイブリッドな巡礼文化—北海道三十三観音霊場の調査から」『徳島地域文化研究』第17号, pp.1-12
- 朝日新聞 高松、松山、徳島、高知各支局編 1980『ふらり巡礼 四国八十八カ所』岡田印刷
- 浅野喜市（写真）佐和隆研・松尾心空（解説）1981『西国霊場』新人物往来社
- 岩波書店編集部・岩波映画製作所 1956『四国遍路』（岩波写真文庫176）岩波書店
- 岡影明編 1972『四国霊跡観光大鑑』四国霊跡観光協会
- 岡正雄 1994『異人その他—他十二篇』（岩波文庫）
- ギブソン, J.J. 1985(1979)『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』古崎敬・古崎愛子・辻一郎・村瀬旻共訳 サイエンス社. (Gibson, J.J. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company)
- 汲田栄功 1984『カラー写真集 霊場そのころ』高知新聞社
- 小池長之 1950「民間信仰の一形態としての巡礼」『日本宗教研究』第123号、日本宗教学会, pp.83-85
- 小嶋博巳 1987「巡礼・遍路」圭室文雄・平野榮次・宮家準・宮田登編『民間信仰調査整理ハンドブック《上・理論編》』雄山閣, pp.158-169
- 佐藤久光 2006『遍路と巡礼の民俗学』人文書院
- 佐藤久光 2009『秩父札所と巡礼の歴史』岩田書院
- 清水武甲 1984『秩父坂東観音霊場 清水武甲写真集』新人物往来社

- 新城常三 1982 『新稿 社寺参詣研究の社会経済史的研究』 塙書房
- 真野俊和 1980 『旅のなかの宗教 巡礼の民俗誌』 日本放送出版協会
- 真野俊和 2000 「杖」 福田アジオほか編 『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館, p121
- 真野俊和編 2006 『講座日本の巡礼 全3巻』 雄山閣
- 瀬戸内放送編 1972 『歴史の旅 四国八十八札所』 秋田書店
- 平幡良雄 1969 『四国八十八カ所』 札所研究会
- 武田明 1969 『巡礼の民俗』 岩崎美術社
- 秩父法人会 2002 『ちちぶ法人会だより』 第38号, 社団法人秩父法人会, 2002年3月
- 中尾堯編 1999(1973) 『(新装版) 古寺巡礼辞典』 東京堂出版
- 中西惟浩編・岡影明撮影 1934 『四国霊跡写真大観』 四国霊跡写真大観刊行会
- 西聡子 2022 『四国遍路と旅の文化 近世後期民衆の信心』 晃洋書房
- 西端さかえ 1964(1972) 『四国八十八札所遍路記』 (第2版) 大法輪閣
- 藤田庄市 1996 『四国八十八カ所』 学習研究社
- 星野英紀 2001 『四国遍路の宗教学的的研究—その構造と近現代の展開—』 法蔵館
- 星野英紀・山中弘・岡本亮輔編 2012 『聖地巡礼ツーリズム』 弘文堂
- 前田卓 1971 『巡礼の社会学 西国巡礼・四国遍路』 ミネルヴァ書房
- 松山市教育委員会編 1981 『おへんろさん—松山と遍路の民俗』 松山市文化財協会
- 宮崎建樹監修・岡崎禎広写真 1995(1999第6刷) 『四国八十八カ所めぐり』 JTB
- Web サイト (2022/10/19閲覧)
- (一社)四国八十八ヶ所霊場会 『四国八十八ヶ所霊場会』 <https://88shikokuhenro.jp/>
- 置賜三十三観音札所会 『置賜三十三観音公式サイト』 <http://www.okitamakannon.com/>
- 西国三十三所札所会 『西国三十三所 巡礼の旅』 <https://saikoku33.gr.jp/>
- 秩父札所連合会 『秩父三十四所観音霊場』 <https://chichibufudasho.com/>
- 日本遺産「日本の終活の旅」推進協議会 『1300年つづく日本の終活の旅 西国三十三所観音巡礼』
<https://jh-saikoku33.jp/>
- 坂東札所霊場会 『坂東三十三観音公式サイト』 <https://bandou.gr.jp/>
- 北海道三十三観音霊場会事務局 『北海道三十三観音』 <https://hokkaido33kannon.com/>
- 最上三十三観音札所別当会 『最上三十三観音』 <https://www.mogami33.com/>